

# 北魏廢仏研究について

——CNKIの論文を踏まえて——

春 本 秀 雄

はじめに

呂宗力「魏晉南北朝至隋禁毀讖緯始末」(『高敏先生八十華誕紀念文集』北京綫裝書局二〇〇六年)の二四五頁に、  
……春本秀雄认为、廢佛禁讖出于同一理由…据《宋書》、索虜傳》和《魏書》、釋老志》、北魏当时流传一谣讖…  
“灭虜吳也。”太武帝“甚惡之”。及蓋吳亂起，其名恰与瑤合，太武自然不能容忍，必平之而后快。恰又在  
此时发现寺院有通蓋嫌疑，加上崔浩等人的煽惑，遂有廢佛禁讖之舉……(……春本秀雄は次のように考  
えた。つまり、廢仏、禁讖は同一の理由によるとした。『宋書』索虜伝と『魏書』釋老志に北魏當時の一謠讖で  
ある「虜を滅するは吳なり」が流伝していたとある。太武帝ははなはだこれを惡み、蓋吳の亂起に及び、その名  
が知れ渡ることが、太武帝は当然のことながら容認できず、これを征伐しなければ気がすまなかった。あたかも  
またこの時期に寺院が蓋吳に通じている嫌疑を発現して、崔浩等の煽惑も加わり、ついに、廢仏禁讖の舉があつ  
たとした……)。  
とある。更に、同書の二四四頁に、

67 参見春本秀雄 “北魏太武帝の废佛と图讖禁絶についての一試論”，载中村璋八编《纬学研究论丛》，東京平河出版社，1993年版，第299～324頁。

とある。また、張箭著『三武一宗抑佛綜合研究』（世界图书出版广东有限公司二〇一五年）の五二〇・五二一頁の「附录Ⅱ 主要参考文献」に、

〔73〕〔日〕春本秀雄・北魏太武帝の廢仏についての一考察〔J〕・日本大正大学綜合佛敎敎研究年報 1988，10。

〔74〕〔日〕春本秀雄・北魏太武帝の廢仏と圖讖についての一試論〔J〕・收入緯學研究叢書——安居香山博士追悼 1989。<sup>⑤</sup>

〔79〕〔日〕春本秀雄・北魏法難の实態解明について〔J〕・日本《大正大学研究紀要》，第九十四輯 2009。

〔80〕〔日〕春本秀雄・中国に於ける北魏法難の研究について〔J〕・日本《大正大学研究紀要》，第九十五輯 2010。

とある。このように、いくつかの拙稿が中国の北魏廢仏の研究文献に取り上げられている。<sup>⑩</sup>ここに、CNKI<sup>⑫</sup>で得た近年の中国の研究論文をも併せて、北魏廢仏研究について述べてみたい。<sup>⑬</sup>

## 第一節 「北魏廢仏」の先行研究について

これまでの日本、中国の「北魏廢仏」の先行研究、並びに、近年のCNKIの中国の研究論文について、ここに述べてみたい。<sup>⑭</sup>

山根幸夫編『中国史研究入門 上』(山川出版社 一九八三年〈昭和五八〉)に、①桑田・守屋等編『六朝史研究文献目録』(阪大文学部 一九五五年〈昭和三十〉) 油印) ②九大東洋史研究室『六朝隋唐政権研究文献目録』(東洋史学一九一九五八年〈昭和二三〉) ③鄭利安編『魏晉南北朝史研究論文書目引得』(台湾中華書局 一九七一年〈昭和四六〉) ④王伊同『六朝史文献提要』(『五朝門第』上、香港中文大出版社 一九七八年〈昭和五三〉)の四つの研究文献目録の紹介がある。ここにおいて従来の北魏廢仏の先行研究について知ることができる。更に、この四つの研究文献目録の編纂以降に発表された、①直海玄哲「北魏太武帝廢仏考」(『仏教史研究』NO一九・二十 創刊二十二年 龍谷大学仏教史研究会 一九八四年〈昭和五九〉) ②羽仁真智「北魏太武帝の廢仏毀釈に関する一考察」(『茅茨』三 東洋史会(青山学院大学文学部史学科内) 一九八七年〈昭和六二〉)の二つの論文は、礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会 二〇〇六年〈平成十八〉)で知ることができる。

因みに、C i n i i の検索(二〇二二年〈令和四〉)五月五日現在)では、羽仁真智「北魏太武帝の廢仏毀釈に関する一考察」(『茅茨』三 東洋史会(青山学院大学文学部史学科内) 一九八七年〈昭和六二〉)の論文の検索ができない。また、拙稿の「北魏法難の研究文献(一)―付廢仏關係論文資料―」(『佛教文化研究』第四十四号 二〇〇〇年〈平成十二〉)の「(1)北魏法難の研究關係の拙論」における北魏廢仏の拙稿、並びに、北京大学から大正大学への留学生の孟慶楠が北京大学図書館で論文検索して得た中国の論文、更には、近年のC N K I の公開ウェブサイト、<https://kns.cnki.net/kns8/defaultresult/index> により知り得る先行研究の論文について、これらは、前述の、山根幸夫編『中国史研究入門 上』(山川出版社 一九八三年〈昭和五八〉)や礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会 二〇〇六年〈平成十八〉)では知ることができない。

詰まるところ、「北魏廢仏」の先行研究は、(1)山根幸夫編『中国史研究入門 上』(山川出版社 一九八三年〈昭和五八〉) (2)礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会 二〇〇六年〈平成十八〉) (3) C i n i i (4) C N K I の四者により、ほぼ、その存在を知り得ることができる。

因みに、これまでに北魏廢仏についての中国の論文を考慮した日本の研究論文は、拙稿「北魏法難の実態解明について」(『大正大学研究紀要』第九十四輯 二〇〇九年〈平成二二〉)・「中国に於ける北魏法難の研究について」(『大正大学研究紀要』第九十五輯 二〇一〇年〈平成二二〉)、だけである。

## 第二節 CNKIにおける北魏廢仏について

北魏廢仏についての二〇〇八年〈平成二十〉五月以前の中国の先行の研究論文の見解についての拙稿がすでにある。<sup>18</sup> 当本稿では、近年のCNKIの公開ウェブサイトにより新たに知り得た北魏廢仏の中国の論文についてここに述べてみたい。<sup>19</sup>

1・・・「论北朝的两次灭佛斗争」肖黎(『河北学刊』一九八二年期刊二)・・・この論文の一〇九頁に次のようにある。「・・・由此可见, 阶级压迫和民族压迫才是广大农民纷纷出家为僧尼的根本原因。(・・・)したがって、階級の抑圧と民族の圧迫により、多くの農民が群がって出家して僧尼となってしまうことが根本的な原因となる。」とある。つまり、仏教の僧侶は出家者であり、税、徭役の免除がある。仏教が盛んになれば、僧尼となる者が多くなり、国家財政を圧迫することは必定である。・・・(一)僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。」

2・・・「北朝“二武灭佛”析」施光明(『杭州师范学院学报(社会科学版)』一九八六年期刊五)・・・この論文の三十頁に次のようにある。「这次灭佛的理由是沙门藏有武器, “当与盖吴通谋”, 其实, 这不过是托辞而已。・・・上述种种, 都不利于拓跋焘的统治。・・・崔浩等人的话并不会发生如此大的作用。・・・可见, 拓跋焘灭佛与佛道之争并无关联。(この廢仏の理由は、沙門が武器を所蔵して「蓋呉の通謀にあずかる」である(が、しかし)、実

際には、これはからくり過ぎない。……これらのすべては、拓跋燾の統治に有害である。……崔浩等の人の話しでは、併せて、このような大きな作用を発生させることはないだろう。……以上からわかるように、拓跋燾の廃仏は仏教と道教の争いとは何の関係もない。」とある。つまり、廃仏の原因は、拓跋燾の統治に有害であるから廃仏が行われたのであり、長安の一寺院の武器隠匿による蓋呉との通謀や崔浩、仏教と道教の争い等は廃仏の行われた理由にはならないとした。筆者の説の「魏を滅ぼすのは（蓋）呉である」の謠言、凶讖についての見解と施光明の「拓跋燾の統治に有害であるから廃仏が行われた」との見解とは、その構造的意味において同類である。……〔2〕北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廃仏を行った。〕

3・・・「北魏太武帝灭佛原因浅析」房芸芳（『历史教学问题』一九九六年期刊四）・・・この論文の六一頁に次のようにある。「纵观北魏太武帝灭佛事件，拓跋焘由礼敬沙門而崇奉而演变为灭佛的恶性事件，是偶然因素与必然因素共同作用的结果。……佛教的外来性就定了初传的佛教必然会遭到中国传统文化抵制和排斥。太武帝灭佛行动又是专制主义王权作用的必然结果。……盖吴起义的发生和道教的兴起可以看作是引发灭佛事件的偶然因素。（見渡すと、北魏太武帝の廃仏事件は、（かつて）拓跋焘が沙門を礼敬して崇奉していたのが、（後に）廃仏の悪性事件に発展したのは、偶然の要因と必然的な要因の組み合わせの結果である。……仏教の外來性は、初伝の仏教が必然として中国伝統文化の拒絶と排除にあつた。太武帝の廃仏行動は、独裁的な王権の必然的な結果である。……蓋呉の蜂起の発生と道教の台頭は、廃仏の偶発的な要因とみなすことができる。」とある。つまり、廃仏が行われたのは、中華思想による外来思想としての仏教の存在をよしとしない太武帝の独裁的な王権にもとづく必然的な結果であるとした。他の原因は偶発的なものとした。……〔3〕中華思想により、外来の仏教は排斥を受けたのが主な原因である。〕……〔4〕種々の原因の組み合わせにより廃仏が行われた。〕

4・・・「北魏儒释道三教关系刍议」黄夏年（『晋阳学刊』二〇〇五年期刊十一）・・・この論文の四九頁に次のようにある。「实际上太武帝灭佛的原因是很复杂的，由多种因素构成。……总之，诸种因素的组合酿成了这次灭佛运动。（実

實際上、太武帝の廢仏の原因は非常に複雑であり、多くの因素構成に由る。……つまり、諸種の要因の組み合わせが、この廢仏運動を醸成したのである。」とある。つまり、廢仏の原因は、いろいろな要素が考えられ、その組み合わせにより引き起こされたものとした。……(4)種々の原因の組み合わせにより廢仏が行われた。」

5・・・「試論南北朝時儒釋道の走向」李虹(『山西大学』二〇〇六年碩士五)・・・この論文の十頁に次のようにある。「分析太武帝滅佛的所作为可以看到，在“为国行道”的主要考虑之外，帝王个人的宗教信仰对国家当时所盛行的宗教具有相当重要的影响。(太武帝の廢仏のなすところを分析すると、「国の為に道を行う」という主要な考えのほかに、太武帝の個人的な宗教的信仰が、国家に対して、当時盛行していた宗教とにかなり重要な影響があったのである。)」とある。つまり、基本的には北魏という国の為に太武帝は廢仏をしたのではあるが、太武帝の個人的な信仰と当時の社会における宗教事情の影響があつたものとしている。……(2)北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廢仏を行った。∨(4)種々の原因の組み合わせにより廢仏が行われた。∨

6・・・「论北魏灭佛之特点」张箭(『徐州师范大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇八年期刊三)・・・この論文の七五頁に次のようにある。『魏書』崔浩伝の「浩非毀佛法，而妻郭氏敬好釈典，時時誦誦。浩怒，取而焚之，捐灰於廁中。(浩、佛法を非毀し、而して、妻の郭氏、釈典を敬好し、時時、誦誦す。浩、怒りて、取りて之を焚き、灰を廁中に捐つ。)」を引用して、「而导致灭佛的直接原因(廢仏を致す直接原因)」とした。更に、七九頁に、「以上我们概括总结了北魏太武帝灭佛的五大特点：……二是起因最独特，主要是政治原因：……。(以上、概括して北魏太武帝の廢仏を総結した五つの大きな点としては、……、第二は起因としては最も独特であり、主要な政治原因である、……)」とある。崔浩は儒教官僚であり、中華思想からインドの仏教に対して廢棄するべきであると考えていた。これが廢仏をする事になった(間接でなく)直接の原因である、としている。しかし、北魏太武帝の廢仏を総結して、その起因の主要としては政治がその原因となる、としている。……(2)北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廢仏を行った。∨(4)種々の原因の組み合わせにより廢仏が行われた。∨

7・・・「北魏太武其人及灭佛其事」王继训（『广州大学学报（社会科学版）』二〇一一年期刊三）・・・この論文の八一頁に次のようにある。「太武帝灭佛是一件偶然的事件，归结为他痴癡精神疾病的暴发。（太武帝の廢仏は、一つの偶然の事件であり、帰結として太武帝の狂氣の精神疾病の暴発の爲である。）」とある。つまり、北魏の廢仏の原因を太武帝の狂氣の精神疾病の暴発であると捉えている。・・・（5）太武帝は狂氣の精神疾病を持っていて、この爲に、この暴発によりたまたま廢仏が行われた。」

8・・・「三武灭佛 皇权与教权之战」曜歌（『文史参考』二〇一二年期刊一）・・・この論文の五六頁に、儒教官僚である崔浩について、道教君主である太武帝について、蓋異と寺院との結びつきを指摘して、「・・・在中国，政权大于教权，皇权高于僧权。（中国に在りて、政治権力が（仏教の）教えの権力よりもまさり、皇帝の権力は僧侶の権力よりも高い。）」とある。・・・（2）北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廢仏を行った。」

9・・・「论北魏太武帝与华北乡村佛教的发展」许栋・杜斗城（『求索』二〇一二年期刊二）・・・この論文の七九頁に次のようにある。「笔者认为，北魏太武帝在位期间一系列的限佛，灭佛政策，迫使大量僧人流落到乡村，为广大乡村民众所接受，促进了北方佛教的发展，这是北魏后期，南北佛教在规模上差距扩大的一个重要原因。（筆者は、北魏太武帝の在位期間中の一連の限仏と廢仏の政策が、多くの僧侶を郷村に流入させて、郷村の人々の受け入れを拡充がなされ、北方仏教の發展を促進して、これが北魏後期における、南北仏教の規模格差の拡大した一つの重要な原因となるものであると考えている。）」とある。廢仏が何故行われたのかのことよりも、廢仏が僧侶を地方の郷村に流入させることになり、結果的に廢仏は仏教を地方に広める役割をなしたとした。・・・（6）廢仏の原因について述べていない。」

10・・・「北魏太武帝灭佛运动中炳灵寺石窟免遭破坏原因初探」他维宏（『丝绸之路』二〇一四年期刊七四）・・・この論文はタイトルにあるように、北魏太武帝の廢仏運動において、炳灵寺の石窟は破壊に遭遇することを免れた原因についての考察である。従って、何故、廢仏が行われたのかとの論考はなされていない。・・・（6）廢仏の原

因について述べていない。〕

11・・・「结构主义视角下的“佛教”社会——北魏兴佛与废佛的社会结构分析」徐婷·陈昌文（『四川大学学报（哲学社会科学版）』二〇一五年期刊二）・・・この論文の四七頁に次のようにある。「・・・首先是来自宗教内部的争斗，即佛教和道教力的此消彼长。・・・其次，佛教自身的腐败成为灭佛的导火索。（・・・第一は、宗教内部の争斗であり、即ち、仏教と道教の力の消長である。・・・第二には、仏教自身の腐敗が廃仏の引き金となっている。）」とある。つまり、仏道二教の対立構造や、当時の仏教の墮落が廃仏の原因だとしている。・・・〔7〕道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廃仏を行った。廃仏の原因を佛道二教の対立構造と捉える。〕〔4〕種々の原因の組み合わせにより廃仏が行われた。〕

12・・・「浅析北魏太武帝灭佛原因及影响」葛瑶瑶（『科学经济社会』二〇一六年期刊二）・・・この論文の一一・一二二頁に、「二、灭佛的原因」で、〔1. 疑虑佛教与反政权势力相勾结〕〔2. 反感佛教自身堕落触犯政令〕〔3. 碍于佛教经济与政权统治的矛盾〕〔4. 尊儒重道而疏离佛教〕〔5. 反对太子拓跋晃亲近佛教〕の項目を述べて、結論的に、「综上所述，太武帝灭佛以政治因素为要，尽管其为触发点有经济、文化等方面的就冲突，但根源仍是出于政治需要，以维护和加强政权统治为根本。（まとめて述べると、太武帝の廃仏は政治的原因が要となり、経済、文化等の方面の紛争を引き金としているが、その根源は政治の需要に出でていて、政権の統治を維持し、強化することを根本としている。）」としている。つまり、廃仏の原因はいろいろなことが引き金となつてはいるが、要するに、太武帝が政権の統治を維持し、強化することを根本としていたのだとした。・・・〔2〕北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廃仏を行った。〕〔4〕種々の原因の組み合わせにより廃仏が行われた。〕

13・・・「北魏太武帝废佛」张国刚（『月读』二〇一六年期刊十五）・・・この論文の三五頁の注⑤に次のようにある。「446年的这次废佛与拓跋焘个人信仰有关，也与信道不信佛的崔浩促成有关。盖吴事件只是一个导火索。崔浩之死，得罪人很多，怙意太武帝废佛也是其键因素之一。（四四六年のこの廃仏と拓跋焘個人の信仰には関係があり、道教



を信じて仏教を信じない崔浩の貢献にも関連がある。蓋呉の事件はただの引き金である。崔浩の死は、罪を得る人が多くして、太武帝の廢仏を扇動したのもその鍵の素因の一つである。」とある。廢仏の原因は、太武帝の個人的な信仰と太武帝が崔浩の影響を受けてでの廢仏であるとした。・・・〔7〕道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立構造と捉える。〔4〕種々の原因の組み合わせにより廢仏が行われた。〕

14・・・「北魏佛敎前期述論」刘岩（『云南大学』二〇一八年硕士二一）・・・この論文の三九頁に次のようにある。「并指出其最终目的是“欲除伪定真，复羲农之治。其一切荡除胡神，灭其踪迹，庶无谢于风氏矣”。拓跋焘被塑造成了要复兴上古治世的华夏共主。（そして、その究極の目的が、「偽を除いて真実を定め、伏羲・神農の治世に復帰したいと欲することであり、その一切は胡神を蕩除して、その痕跡を滅して、そうして初めて風氏（風云人物）の言動が大局を左右する人物）に謝罪することをなくすることができる」と示している。（つまり）拓跋焘は、形として、上古治世の華夏共主を必ず復興することをしたのである。」とある。つまり、太武帝は、儒敎国家を理想とする国家観を抱いていて、完膚なき廢仏をしたとされている。・・・〔8〕北魏太武帝の廢仏は、（宰相崔浩の助言を聞き入れて）儒敎国家の確立を目指したものである。〕

15・・・「拓跋焘灭佛辩误及奉儒立国之策新探」王怀成（『宁夏社会科学』二〇二〇年期刊二）・・・この論文の一五八頁に次のようにある。「拓跋焘实施的真正灭佛之举，为的是效仿汉武帝，确立儒家独尊的地位。（拓跋焘が実施した本当の廢仏の举行（の理由）は、漢武帝をモデルにして、儒家の独尊の地位を確立するためである。）」とある。・・・〔8〕北魏太武帝の廢仏は、（宰相崔浩の助言を聞き入れて）儒敎国家の確立を目指したものである。〕

16・・・「北朝」二武灭佛对佛敎文献聚散的影响研究」焦雪婷（『东北师范大学』二〇二一年九四）・・・この論文の一四頁に次のようにある。「太武帝“锐志武功，每以平定祸乱为先”，听信司徒崔浩的劝告，信奉寇谦之的天师道，排斥佛敎，后来发展为灭佛的行动。（太武帝は、「志を武功に鋭くして、いつも禍乱を平定することを先として」お

り、司徒の崔浩の勧告を聞き入れて、寇謙之の天師道を信奉して、仏教を排斥して、後に廢仏の行動に發展した。)とある。つまり、北魏の廢仏の原因を崔浩の勧告、仏道二教の対立の影響と捉えている。・・・(〔7〕 道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立構造と捉える。)

以上の十六の中国における北魏廢仏の論文について、概括して分類をすると次のようになる。

- 〔1〕 僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。・・・(上記の論文の番号の) 1 (の論文)。<sup>(21)</sup>
- 〔2〕 北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廢仏を行った。・・・(上記の論文の番号の) 2・5・6・8・12 (の論文)。<sup>(22)</sup>
- 〔3〕 中華思想により、外来の仏教は排斥を受けたのが主な原因である。・・・(上記の論文の番号の) 3 (の論文)。<sup>(23)</sup>
- 〔4〕 種々の原因の組み合わせにより廢仏が行われた。・・・(上記の論文の番号の) 3・4・5・6・11・12・13 (の論文)。<sup>(24)</sup>
- 〔5〕 太武帝は狂気 of 精神疾病を持っていて、この為、この暴発によりたまたま廢仏が行われた。・・・(上記の論文の番号の) 7 (の論文)。<sup>(25)</sup>
- 〔6〕 廢仏の原因について述べていない。・・・(上記の論文の番号の) 9・10 (の論文)。<sup>(26)</sup>
- 〔7〕 道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立構造と捉える。・・・(上記の論文の番号の) 11・13・16 (の論文)。<sup>(27)</sup>
- 〔8〕 北魏太武帝の廢仏は、(宰相崔浩の助言を聞き入れて、) 儒教国家の確立を目指したものである。・・・(上記の論文の番号の) 14・15 (の論文)。<sup>(28)</sup>

以上である。この〔1〕から〔8〕までのような見解の諸論者があるのではあるが、これらの見解は次の二点において問題がある。

(1) 【道教の側面】・・・寇謙之の新天師道が仏教を内包したものであることへの考察考慮が不足している。・・・仏教を内包した道教である新天師道を尊信した北魏太武帝は、完膚なき廢仏を行ってはいけなかった。そこで、「1」・「2」・「3」・「7」・「8」の見解においては、部分的な廢仏を行ったその理由にはなり得ても、道教君主である太武帝が完膚なきまでの廢仏をしたその理由にはできない。構造的に、太武帝は仏教を内包した道教である新天師道を尊信した道教君主であったので、完膚なきまでの廢仏を行ってはいけないのである。

(2) 【儒教の側面】・・・凶讖に対する考察考慮が不足している。・・・北魏太武帝は何故、廢仏を行ったかについて、先の拙稿、「凶讖と北魏の廢仏について——李弘と劉潔・蓋呉の凶讖禍——」（『大正大学研究紀要』第一〇七輯二〇二二年〈令和四〉）に、「・・・北魏の太武帝は、武功を第一に考え、禍乱平定を目標に帝権の確立を目指していた。太武帝にとつては、その目的を達成させる為の儒教・仏教・道教であった。つまり、凶讖禁絶を行つたのも、廢仏を行つたのも、道教君主となったのもこの為である。このような北魏の太武帝にとつては、北魏政権を転覆させる可能性を持つ謠言を後ろ盾とした蓋呉の反乱が、長安の一寺院と蓋呉の結びつきがあることを太武帝が認識をしたことを契機に、長安の一寺院の僧侶、仏教、蓋呉の謠言、凶讖、との相互関連を持つ全体像を一掃すべく、廢仏と凶讖禁絶とを同時期に断行する状況を生み出す結果となった。・・・つまり、太武帝は為政者としての自らの帝権の確立の為に、天命としての凶讖のある時には利用し、ある時にはその帝権の確立を阻害する存在としての諸刃の劍の性格を有する凶讖の存在の認識を既に充分に持つており、その為に、同類の厄介な謠言を完膚なきまでに抹消すべく、蓋呉、長安の一寺院、僧侶、仏教、謠言、凶讖の全体像を一掃せねばならず、凶讖禁絶と寇謙之の嫌がる全面的な廢仏とを同時期に断行しなければならなかったのである。このことは長安の一寺院と蓋呉と謠言の連関の要素がなければ全面的な完膚なきまでの廢仏や凶讖禁絶は行われなかったことを意味している。・・・」との旨を述べた。筆者は、北魏太武帝の思想、考え方等を十分に把握して考慮をして、廢仏が何故行われたのかを論じた。崔浩や寇謙之の儒教・仏教・道教観の研究成果を十分に踏襲した上での北魏

太武帝についてであることは言うまでもない。<sup>29)</sup> したがって、「4」のような見解ではない。

以上のように、(1)【道教の側面】・(2)【儒教の側面】において、北魏太武帝の廢仏に關しての考察が、今回取り上げた十六の諸論文で不足している。<sup>30)</sup>

### 第三節 北魏廢仏の原因における「謠言」について

『宋書』索虜伝に、

先是、虜中謠言、「滅虜者呉也」。燾甚惡之。二十三年、北地瀘水人蓋呉、年二十九、於杏城天台举兵反虜。諸戎夷普並響應、有衆十余万。燾聞呉反、惡其名、累遣軍擊之、輒敗。(これより先、虜中の謠言に、「虜を滅するは呉なり。」と。燾甚だこれを惡む。二十三年、北地瀘水の人、蓋呉、年二十九、杏城天台に於いて举兵し虜に反す。諸もろの戎夷普ねく並んで響應し、衆十余万有り。燾、呉の反を聞き、其の名を惡み、軍を累遣してこれを撃ち、輒ち敗る。)

とある。ここに、「虜中謠言、「滅虜者呉也」。」燾甚惡之。(虜中の謠言に、「虜を滅するは呉なり。」と。燾甚だこれを惡む。)」とある。武功を第一に考え、帝権の確立を何よりも望んでいた太武帝にとつては、謠言を後ろ盾とした蓋呉の反乱は許すことができない。前節の「(2)【儒教の側面】」でも述べたように、筆者の説はこの「謠言」が北魏廢仏の主要な原因であるとしている。

窪添慶文著『北魏史 洛陽遷都の前と後』(東方書店 二〇二〇年(令和二))の一八三頁に、

……そして四四六年には仏教弾圧に踏み切る。弾圧を招いた要因はふたつある。ひとつは四四五年に陝西省中部から甘肅省東部にかけての広い地域に居住する蓋呉(がいご(ママ))という人物(盧水(ろすい)胡(こ

の人とされる)を中心に起こした大反乱であり、北魏は討伐に苦しんだ。もうひとつは、討伐に向かった太武帝が入った長安城内に寺院で武器が発見されたことである。寺院と蓋呉との連携と断じた太武帝は、崔浩の進言により、直接にきつかけとなった長安のある寺の僧侶を誅殺し、仏像を焼いたのみならず、全国に、僧侶をかくまうことを許さず、期限を過ぎても出て来ない場合は、僧侶本人を処刑するだけでなく、かくまった者の一門をも誅殺するという厳しい詔を発出したのである……。

とある。北魏太武帝は仏教を内包した道教である寇謙之の新天師道を尊信する道教君主である。そこで、崔浩の廃仏の進言は的を射たものではないことは明白である。そして、ここで、疑問に思うことは、蓋呉は陝西省中部から甘肅省東部にかけての地域に居住しており、その地域は蓋呉の影響下にあつたことが予測されるが、廃仏は陝西省中部から甘肅省東部にかけて以外の北魏全土に詔が発せられているのである。このことは、廃仏が行われた要素として「寺院と蓋呉との連携」以外の可能性があることを意味している。何故ならば、北魏太武帝は、仏教を内包した新天師道の道教君主であつたので、「寺院と蓋呉との連携」から、蓋呉の影響下にあつた陝西省中部から甘肅省東部にかけての地域の廃仏を行ったことは当然ではあるが、「全国に、僧侶をかくまうことを許さず、期限を過ぎても出て来ない場合は、僧侶本人を処刑するだけでなく、かくまった者の一門をも誅殺する」という厳しい詔を北魏全土に発したのは、「寺院と蓋呉との連携」以外の要素があることを意味している。つまり、「寺院と蓋呉との連携」以外の要素とは、拙稿のこれまでの考察では、この機における「崔浩の進言」以外の廃仏の原因として、図讖に類する「謠言」の存在があり、前節「(2)儒教の側面」でも述べたように、北魏太武帝は「謠言を完膚なきまでに抹消すべく、蓋呉、長安の一寺院、僧侶、仏教、謠言、図讖の全体像を一掃」しなければならなかつたのである<sup>(2)</sup>。

また、張箭著『三武一宗抑佛综合研究』(世界图书出版广东有限公司二〇一五年)がある。この本の十八頁に、  
挟图讖以反魏的僧人有之。趁盖吴起义机，与义军通谋反魏的僧人也很可能有之。(图讖を挟蔵して魏に反する僧侶がいる。(この僧侶は)蓋呉の起義の機会を利用して、(蓋呉の)義軍と通謀して魏に反する僧侶である可能性

が高い。)。

とある。このように、張箭は僧侶と図讖との関係を認めている。<sup>(33)</sup> 北魏全土の禍乱平定を何よりも望む太武帝が「仏教——僧侶—図讖(謠言)——蓋呉」の関係を完全に一掃しなければならなかったため、廢仏は行われたのである。従って、「寺院と蓋呉との連携」以外の図讖の要素があることにより、完膚なき廢仏は行われたのである。

## 結

「北魏廢仏」について研究をするには、先ず、先行研究を探すのに、(1)山根幸夫編『中国史研究入門 上』(山川出版社 一九八三年〈昭和五八〉) (2)礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会 二〇〇六年〈平成十八〉) (3)C i N i i (4)C N K I によりその存在を知ることができる。<sup>(33)</sup>

今回、C N K I で得た近年の中国の研究論文に、拙稿「図讖と北魏の廢仏について——李弘と劉潔・蓋呉の図讖禍——」(『大正大學研究紀要』第一〇七輯 二〇二二年〈令和四〉)のような、北魏太武帝が「仏教—僧侶—図讖(謠言)—蓋呉」を一つのものとして全て一掃するべく、完膚なきまでの廢仏をしたとの観点の論文は、その類例がなかった。北魏廢仏研究について、総合して述べると次のようになる。日本、中国の北魏太武帝の廢仏に関しての先行研究において、これまでの拙論の説のような廢仏の主な原因を図讖にあるとした研究はない。これは何故かといえば、北魏太武帝の廢仏についての日本、中国の先行研究において、(1)道教の側面・・・寇謙之の新天師道が仏教を内包したものであることへの考察考慮の不足 (2)儒教の側面・・・図讖に対する考察考慮の不足 の二つがその主な理由である。本拙稿「第二節 C N K I における北魏廢仏について」の諸先行の見解は、この(1)・(2)を考慮していない論考である。<sup>(33)</sup>

つまり、従来の仏教史の面からの研究、正史資料の面から研究だけではなくて、前述の(1)・(2)のような、中国思想の道教(特に「新天師道」)・儒教(特に「図讖」)の側面等からの考察、研究成果を踏襲した観点を持つ北魏太武帝の廃仏についての研究でなければ、その真相究明は不可能である。<sup>56)</sup>

## 註釈

- (1) 呂宗力の論文、「魏晋南北朝至隋禁毀讖緯始末」(『高敏先生八十華誕紀念文集』北京綫裝書局二〇〇六年)の主張についての筆者の見解は、先に、拙稿「太平真君五年正月以前の蓋呉の反乱について」(『大正大学研究紀要』第一〇三輯 二〇一八(平成三十))で述べた。因みに、向燕南の論文、「北魏太武帝灭佛原因考辨」(『北京师范大学学报(社会科学版)』一九九四年第二期)についての筆者の見解は、拙稿「北魏の二回の廃仏について——特に向燕南の説について——」(『廣川堯敏教授古稀記念論集 浄土教と佛教』山喜房佛書林 二〇一四年(平成二六))がすでにある。当本稿においては、張箭の論文、「论北魏灭佛之特点」(『徐州师范大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇八年期刊三)と著書の『三武一宗抑佛综合研究』(世界图书出版广东有限公司二〇一五年)についての筆者の見解を述べた。呂宗力・向燕南・張箭に共通にしていることは、(1)道教・・・寇謙之の新天師道が仏教を内包したものであることへの考察考慮の不足 (2)儒教・・・図讖に対する考察考慮の不足 の二点にある。
- (2) 「木」は「本」である。「木」は誤植である。
- (3) 註(2)、参照。
- (4) 「い」は「いて」の誤植。
- (5) 「1989」は「1993」の誤植。
- (6) 註(2)、参照。

- (7) 「ら」は「と」とするべきである。
- (8) 註(2)、参照。
- (9) 註(7)、参照。
- (10) 张箭の当本稿で取り上げた以前のこれまでの論文については、先の拙稿の「中国に於ける北魏法難の研究について」(『大正大学研究紀要』第九十五輯 二〇一〇年〈平成二二〉)の「三 孟慶楠の紹介した資料について」の④张箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」(《西南民族学院学报(哲学社会科学版)》二〇〇〇年第十二期)・⑮张箭「三武一宗灭佛研究」(四川大学博士论文 二〇〇一年)がある。
- (11) 当本稿で示したように都合、四つの筆者の論文が呂宗力、张箭の研究文献に取り上げられている。因みに、拙稿「寇謙之研究の一側面」(『川勝守・賢亮博士古稀記念 東方学論集』汲古書院 二〇一三年〈平成二五〉)の(注3)にこれまでの拙稿、四十八本の論文名を記した。これ以外は次の如くである。1・・・「(研究ノート)北魏法難と図讖の研究について」(『東洋哲学研究』創刊号 鈴木印刷 二〇一四年〈平成二六〉) 2・・・「北魏の二回の廢仏について——特に向燕南の説について」(『廣川堯敏教授古稀記念論集 浄土教と佛教』山喜房佛書林 二〇一四年〈平成二六〉) 3・・・「北魏廢仏の説について——蓋呉と図讖と僧侶の関係——」(『小此木輝之先生古稀記念論文集 歴史と文化』青史出版 二〇一六年〈平成二八〉) 4・・・「太平真君五年正月以前の蓋呉の反乱について」(『大正大学研究紀要』第一〇三輯 二〇一八〈平成三〇〉) 5・・・「魏書」積老志における北魏の廢仏について」(『大正大学研究紀要』第一〇四輯 二〇一九〈平成三一〉) 6・・・「図讖と北魏の廢仏について——李弘と劉潔・蓋呉の図讖禍——」(『大正大学研究紀要』第一〇七輯 二〇二二年〈令和三〉)以上の六本である。更に、これらの拙論の主張を纏めて、従来の研究の定説とは異なる、新説である春本説の提示をした単著『北魏法難の研究』(汲古書院 二〇〇二年〈平成十四〉私家版)・『北魏法難と図讖の研究』(汲古書院 二〇一二年〈平成二四〉私家版)・『北魏廢仏と図讖の研究』(汲古書院 二〇一三年〈平成二五〉私家版)



がある。

- (12) 初め、二〇二二年〈令和四〉三月十五日に、大正大学仏教学部の石川琢道准教授より、CNKIの存在の示唆を受けた。その後、CNKIの公開ウェブサイトを、<https://kns.cnki.net/kns8/defaultresult/index> の「三武一宗」・「北魏廢仏」についての論文検索をした。先に、「北魏廢仏」についての中国の論文についての拙稿、「中国に於ける北魏法難の研究について」(『大正大学研究紀要』第九五輯 二〇一〇年〈平成二二〉)がある。これは、二〇〇八年〈平成二〇〉五月に、北京大学図書館で、検索をして、その結果得られた論文資料を用いての論考であった。今回の拙稿は、この続編に相当する。前回、用いた論文ではない新出の「北魏廢仏」についての中国の論文、十六本の存在をCNKIの公開ウェブサイトで知り得た。これを、大正大学図書館、大正大学大学院宗教学修士課程2年の尹紹恒(学籍番号2103036)、東方書店業務センターコンテンツ事業部の協力を得て、二〇二二年〈令和四〉五月十八日に十六本の論文を全て入手した。当本稿はこれらの十六の諸論考を新たに入手したることによること執筆の主な動機となっている。
- (13) これまでの従来筆者の北魏廢仏についての見解は、先の拙稿「図讖と北魏の廢仏について——李弘と劉潔・蓋呉の図讖禍——」(『大正大学研究紀要』第一〇七輯 二〇二二年〈令和四〉)の註(3)、参照。更に、註(11)の北魏廢仏についての五十五本の拙稿、参照。
- (14) 拙稿に、「日本に於ける北魏法難の研究について——先考研究について——」(『宇高良哲先生古稀記念論文集「歴史と仏教」(文化書院) 二〇一二年〈平成二四〉)・「中国に於ける北魏法難の研究について」(『大正大学研究紀要』第九十五輯 二〇一〇年〈平成二二〉)・「北魏法難の実態解明について」(『大正大学研究紀要』第九十四輯 二〇〇九年〈平成二一〉)がある。これらの拙稿で、既に、日本、中国の先行研究について述べた。本節では、これらをまとめて、更に、近年のCNKIでの中国の研究論文についても触れて、総括して、「北魏廢仏」の先行研究の所在について述べた。

- (15) 羽仁真智「北魏太武帝の廢仏毀釈に関する一考察」(『茅茨』三、東洋史会(青山学院大学文学部史学科内)一九八七(昭和六二))の論文は、C i n i i の検索(二〇〇二年(令和四)五月五日)でも、日本印度学仏教学データベースセンター(INBUDS)の検索(二〇〇二年(令和四)五月五日)でも検索をすることができない。
- (16) 孟慶楠は、大正大学文学部歴史文化学科への短期留学生(二〇〇七年(平成一九)四月から二〇〇八年(平成二〇)二月(八月)・・・北京大学哲学研究所中国哲学修士課程二年)である。この孟慶楠が、二〇〇八年(平成二〇)四・五月に北京大学図書館で論文検索して得た中国の論文データを筆者に提供した。このことについては、拙稿、「北魏法難の実態解明について」(『大正大学研究紀要』第九十四輯、二〇〇九年(平成二二))、を参照されたい。
- (17) 註(11)にある諸拙稿は、(1)山根幸夫編『中国史研究入門 上』(山川出版社、一九八三年(昭和五八))、(2)礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会、二〇〇六年(平成一八))、(3)C i n i i (4)CNKIで、ほぼ知り得ない。
- (18) 北魏廢仏については、前述の拙稿、「北魏法難の実態解明について」(『大正大学研究紀要』第九四輯、二〇〇九年(平成二二))・「中国に於ける北魏法難の研究について」(『大正大学研究紀要』第九五輯、二〇一〇年(平成二二))において、1・・・向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」(《北京师范大学学报(社会科学版)》一九九四年第二期)、2・・・栾贵川「北魏太武帝灭佛原因新论」(《中国史研究》一九九七年第二期)、3・・・孙晓莹「浅析北魏太武帝灭佛原因」(《当代宗教研究》二〇〇〇年第三期)、4・・・张箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」(《西南民族学院学报(哲学社会科学版)》二〇〇〇年第十二期)、5・・・李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」(《通化师范学院学报》二〇〇一年第二十二踏まえた卷第三期)、6・・・劉淑芬「從民族史的角度看太武滅佛」(《中央研究院歷史語言研究所集刊》二〇〇一年三月)、7・・・李玉芳「北魏太武帝灭佛原因浅析」(《宜宾学院学报》二〇〇四年第四卷第一期)、8・・・王勇「太武帝大规模灭佛原因初探」(《燕北师范学院学报》二〇〇四年第四期)、9・・・陈燕「北魏太武帝崇道抑佛的回顾与反思」(《云南民族大学学报(哲学社会科学版)》二〇〇五年第四期)、10・・・

王勇「北魏前期佛教文化初探」(《晋中学院学报》二〇〇五年第二期) 11:・肖黎「论北朝的两次灭佛斗争」(《河北学刊》一九九二年第一期) 12:・・・施光明「北朝的寺院经济和反佛浪潮」(《浙江学刊》一九九三年第一期) 13:・・・吴平「北朝的兴佛与灭佛」(《华夏文化》二〇〇〇年第三期) についての筆者の見解を明確にした。この二本の拙稿の結論としては、要旨として述べるのと次のようになる。(1)日本において定説となっている塚本善隆先生の「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である。」との説を春本説では、「非」とし、「北魏太武帝の廢仏の中心人物は太武帝自身である。」とした。(2)春本説を参考としない春本説と同様の説は中国に於ける北魏法難の研究論文の諸説に於いては存在していなかった。(3)完膚無き迄の全国の廢仏を仏教を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道の道教君主であった太武帝は行なつてはいけない事情があつたのである。しかし、中国の諸説は上記の如くの理解の無い所に立説されているところに問題点がある。(4)「謠言―図讖―僧侶―仏教」の密接な連関のもとに、図讖禁絶と連携して完膚無き迄の廢仏をする必要性が太武帝にはあつた。(5)北魏の法難を図讖禁絶の側面から論究すると、上記(3)の理由があつたとしても上記(4)の理由により、太武帝は完膚無き迄の全国の廢仏を行わなければならなかつたのである。(6)北魏太武帝の廢仏と図讖禁絶は同じ時期に行われ、その行われた理由は図讖禁絶が「主」で廢仏は「従」の力関係の間柄に於いて行われたのである。この(3)・(4)・(5)の筆者の見解については、当本拙稿の「結」において、〈中国思想の道教(特に「新天師道」)・儒教(特に「図讖」)の側面等からの考察、研究成果を踏襲した観点を持つ北魏太武帝の廢仏についての研究でなければ、その真相明は不可能である。〉、である。

(19) 註(12)、参照。

(20) 当本稿の、第二節【2】儒教の側面】、第三節、並びに、註(13)、参照。

(21) 北魏社会経済の圧迫から一部分の廢仏が行われたとすることは理解が可能ではあるが、完膚なきまでの全国的な廢仏がおこなわれたのが、北魏社会経済の圧迫からとするのは、仏教を内包した道教の君主である太武帝である

- ことからして、無理な見解である。註(27)、参照。
- (22) 北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、廢仏を(部分的に)行った、と言うのなら、理解ができる。しかし、全国的な完膚なきまでの廢仏が行われたとするのは、仏教を内包した道教の君主である太武帝であることからして、無理である。註(27)、参照。
- (23) 「外来の仏教」を内包した新天師道の寇謙之の道教を尊信した道教君主である北魏太武帝は、「外来の仏教」を大切にしなければならなかった事情がある。つまり、「外来の仏教」を初めから非とする中華思想により、太武帝は「外来の仏教」を廢絶したとする見解は、的を射ていない、不可解な見解である。註(27)、参照。
- (24) 多くの廢仏の原因が考えられ、どれも、決定的でないとした見解があるが、図讖から北魏の廢仏の原因を考察すると、全国的な完膚なきまでの廢仏をしなければならない理由が太武帝にはあったことを理解することが可能になる。拙稿、「図讖と北魏の廢仏について——李弘と劉潔・蓋呉の図讖禍——」(『大正大學研究紀要』第一〇七輯 二〇二二年〈令和四〉)、註(27)、参照。
- (25) この「5」の見解で北魏全土の完膚なき廢仏が行われたとするのは、少し故あるようにも考えられるが、人間は誰でも喜怒哀樂の情があり、その一部分を取り上げて狂気の精神疾病を持つてとの論を展開することは、少々、無理であると考ええる。つまり、太武帝が狂気の精神疾病を持つていて、と言うよりも、深慮遠謀を持った正常な人間であったとして、北魏太武帝の廢仏事件をどのように見るのか、がこれまでの従来多くの論考、考察であった。北魏太武帝を狂気の精神疾病者であることを否定することはできない面もあるとは考えられるが、この為に全国的な完膚なきまでの廢仏が行われたとすることは、正史である『魏書』の世祖紀や積老志において、その確認、確証は得られない。拙稿、「『魏書』積老志における北魏の廢仏について」(『大正大學研究紀要』第一〇四輯 二〇一九〈平成三十一〉)、註(27)、参照。
- (26) 廢仏の原因については、註(24)・註(27)、参照。

- (27) 拙稿の見解では、北魏太武帝は仏教を内包した新天師道の寇謙之の道教を尊信した道教君主であった。そこで、儒教官僚の崔浩が廃仏を進言すれば進言するほどに、太武帝は崔浩を失脚させようとする方向へ気持ちが傾くと考える。それに、仏道二教の対立構造からの完膚なきまでの全国的な廃仏がおこなわれたとするのは、仏教を内包した新天師道の道教君主である太武帝からして不可解な見解である。拙稿、「北魏の凶讖禁絶——特に太武帝時について——」（『大正大学研究紀要』第九十二輯 二〇〇七年（平成一九））、並びに、註(11)の諸拙稿、参照。
- (28) 北魏太武帝の側近は寇謙之と崔浩の二人である。太武帝は仏教を内包した新天師道の寇謙之の道教を尊信した「道教君主」であり、儒教官僚である崔浩の儒教国家を目指すことに同調した「儒教君主」ではない。つまり、崔浩が廃仏を進言すれば進言するほどに、太武帝は崔浩を失脚させようとする方向へ気持ちが傾くのである。従って、「北魏太武帝の廃仏は、（宰相崔浩の助言を聞き入れて、）儒教国家の確立を目指したものである。」とするのは理解不可能な見解である。註(27)、参照。
- (29) 註(11)の諸拙稿、並びに、註(13)、参照。
- (30) 当本稿では、十六の中国の諸論文についての筆者の見解を述べた。「5」の7の論文については註(25)参照。また、「6」の9・10の論文については、初めから廃仏の原因についての見解が述べられていない。因みに、包括的に大所高所から鳥瞰をして広義的に考えると、この中国の十六の諸論文をも含めて、今までの先行研究、全てにおいて、「(1)【道教の側面】・(2)【儒教の側面】」の北魏太武帝の廃仏についての考察が不足している。註(11)の諸拙稿、参照。
- (31) 『魏書』卷百十四、釈老志、太平真君七年三月、にあるように、太平真君七年（四四六）に堂塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡經をみな撃破焚焼すべきこと、及び、沙門は少長となく悉く生き埋めにすべきことを命じた。更に、『高僧伝』卷十曇始伝（大正五十・三九二中）に、「宣皇臣征鎮諸軍、刺史」、「統内僧尼」とある。これらのように、太武帝は北魏全土に対して完膚なき廃仏をした。註(11)、参照。

(32) 註(11)・註(24)、参照。

(33) 張箭は当本稿の「はじめに」に記したように、拙稿の四本の論文の存在を知り得ている。張箭著『三武一宗抑佛綜合研究』（世界图书出版广东有限公司二〇一五年）には、以上の四本の拙稿を注記はしているが、筆者の論考を踏まえたと言うその明確な指摘、論述はしていない。しかし、張箭が僧侶と図讖との関係を認めるのならば、拙稿の主張の、「北魏全土の禍乱平定を何よりも望む太武帝が「仏教―僧侶―図讖（謠言）―蓋異」の関係を完全に一掃しなければならなかったので、廢仏は行われたのである。」を認めざるを得ない。何故ならば、張箭著『三武一宗抑佛綜合研究』（世界图书出版广东有限公司二〇一五年）の七十二頁に、「以上我们概括总结了北魏太武帝灭佛的五大特点……二是起因最独特，主要是政治原因……。（以上、概括して北魏太武帝の廢仏を総結した五つの大きな点としては……、第二は起因が最も独特であり、主要は政治原因である……）」とある。つまり、張箭は、北魏太武帝の廢仏を総結して、その起因の主要は政治原因である、としているのであるから、太武帝の図讖についての考察を考慮した上での論であると考えなければならないからである。註(1)、註(10)、註(18)、参照。

(34) 註(17)、参照。

(35) 註(30)、参照。

(36) 従来、日本においては塚本善隆先生の北魏太武帝の廢仏における研究が妥当であるとして定理定論となつて定説化している。塚本善隆先生は仏教史の面からの研究であり、道教（特に「新天師道）・儒教（特に「図讖」）の側面についての見識が浅い。併せて、中国の諸論考においても、道教（特に「新天師道）・儒教（特に「図讖」）の側面について、充分な見識を持った上での北魏太武帝の廢仏についての論考を見出すことはできない。註(1)・註(11)・註(21)・註(22)・註(23)・註(24)・註(25)・註(26)・註(27)・註(28)・註(29)・註(30)、参照。因みに、筆者の説は、当本稿、第二節・第三節においてその主な見解の要点を述べた。詳しくは、註(11)の諸拙稿、参照。